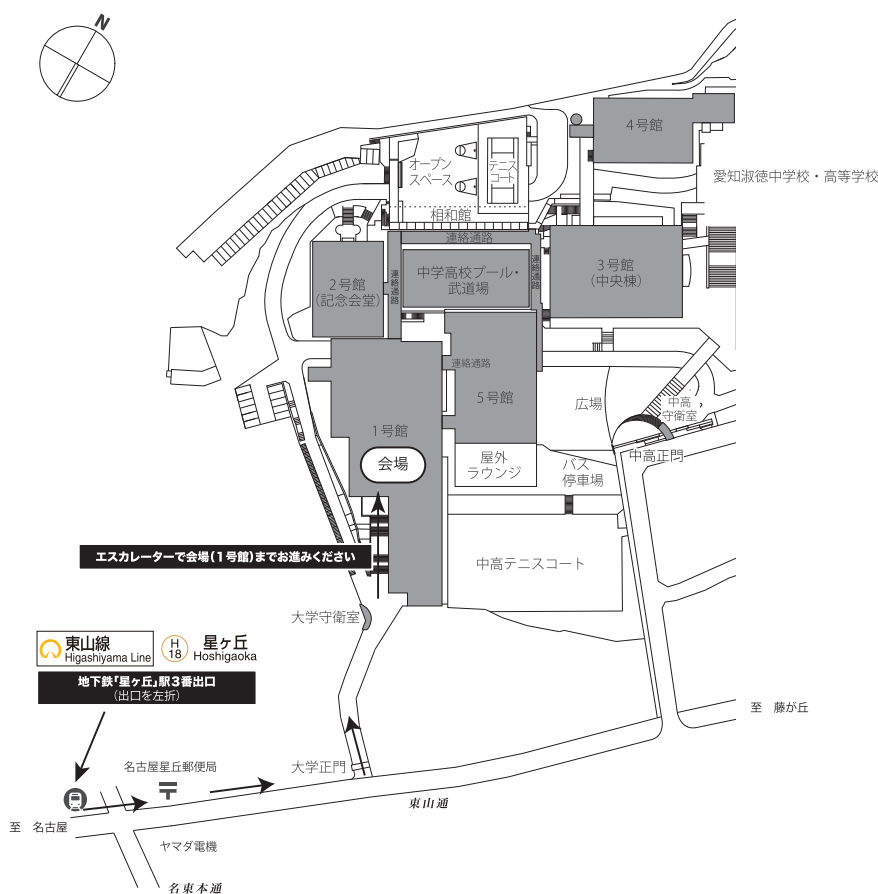


日本英文学会中部支部 第76回大会プログラム

特別講演・シンポジウム・研究発表要旨



開催日：2024年9月22日(日)

会場：愛知淑徳大学 星が丘キャンパス

(〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘23)

日本英文学会中部支部事務局

〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9

愛知淑徳大学 長久手キャンパス 文学部 二村慎一研究室内

E-mail: chubu@elsj.org

HP: <http://www.elsj.org/chubu/>

愛知淑徳大学（星ヶ丘キャンパス）へのアクセス

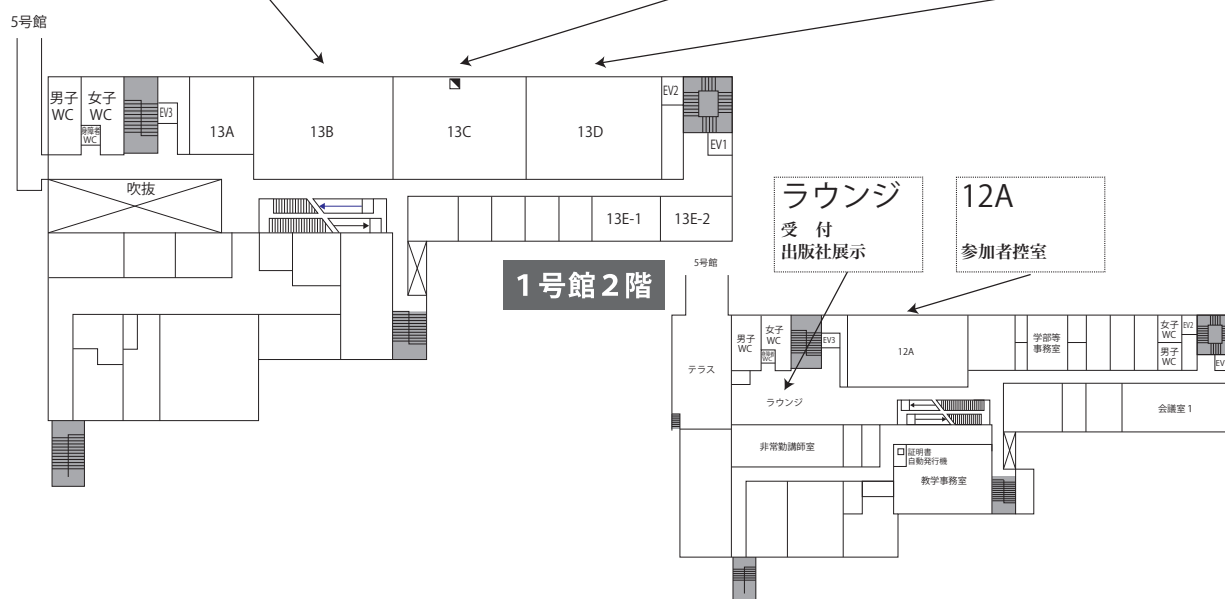
名古屋駅より地下鉄東山線「星ヶ丘」駅まで約18分（270円）

「星ヶ丘」駅3番出口を出て東（左）へ直進徒歩約3分

会場案内図

1号館3階

13B	開会式 12:30~12:35 総会 12:35~12:45 特別講演 12:50~13:50 シンポジウム第1室(アメリカ文学・イギリス文学・日本文学) 14:00~15:40 研究発表第1室(イギリス文学) 15:50~17:15 閉会式 17:20~17:25	13C	シンポジウム第2室(英語教育学) 14:00~15:40 研究発表第2室(アメリカ文学・イギリス文学) 15:50~17:15	13D	研究発表第3室(英語学) 15:50~17:15
-----	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----	--------------------------------------------------------------------	-----	--------------------------



開催校からのお知らせ

【学内への自動車での入構について】

大学構内に学会用の駐車スペースは用意されておりませんので、自動車での入構はできません。公共交通機関をご利用ください。

【食事場所について】

大会当日、大学内の食堂は営業していません。地下鉄「星ヶ丘」駅周辺のレストランやカフェなどをご利用ください。

【周辺のコンビニ情報など】

「星ヶ丘」駅構内や「星ヶ丘駅バスターミナル」内ほか数か所にコンビニがございます。また、「星ヶ丘」駅は、名古屋三越星ヶ丘店（地下食料品フロア）と地下道で直結しています。

【懇親会について】

開催校の都合により、懇親会は開催いたしません。参加者控室（1号館2階12A）にお飲み物やお菓子などをご用意いたします。

日本英文学会中部支部第76回大会プログラム

開催日：2024年9月22日（日）

会場：愛知淑徳大学星が丘キャンパス（名古屋市千種区桜が丘23）

大会受付 12:00より （1号館2階ラウンジ）

開会式 12:30～12:35 （1号館3階13B）

開会の辞 日本英文学会中部支部 支部長 太田直子

総会 12:35～12:45 （1号館3階13B）

特別講演 12:50～13:50 （1号館3階13B）

〈没後120年、KWAIIDAN出版120年〉

ラフカディオ・ハーン、いまを生きる！—文化資源としての作家と文学

講師 小泉 凡（島根県立大学短期大学部名誉教授・小泉八雲記念館館長）

シンポジウム 14:00～15:40

第1室（アメリカ文学・イギリス文学・日本文学） 1号館3階13B

〈ラフカディオ・ハーン没後120年、KWAIIDAN出版120年〉—ハーンの「再話」を巡って—

司会 平林美都子（愛知淑徳大学名誉教授）

講師 梅垣昌子（名古屋外国語大学教授）

講師 小倉 斉（愛知淑徳大学名誉教授）[日本文学]

第2室（英語教育学） 1号館3階13C

小・中高・大の英語教育 ～つながりを目指して～

司会 二村 慎一（愛知淑徳大学教授）

講師 阿部健太郎（名古屋市立星ヶ丘小学校教諭）

講師 藤本 恭子（愛知淑徳大学准教授）

講師 三島恵理子（愛知淑徳大学助教）

研究発表 15:50～17:15

第1室（イギリス文学） 1号館3階13B

第2室（アメリカ文学・イギリス文学） 1号館3階13C

第3室（英語学） 1号館3階13D

（ 第1発表 15:50～16:15
第2発表 16:20～16:45
第3発表 16:50～17:15 ）

閉会式 17:20～17:25 （1号館3階13B）

閉会の辞 日本英文学会中部支部 副支部長 中郷 慶

研究発表一覧

第1室（イギリス文学）1号館3階13B

司会 鈴木実佳（静岡大学教授）

1. 『ジェイン・エア』におけるエドワード・ロチェスターの「身体障害」
橋本千春（フェリス女学院大学大学院）
2. 「ビートン夫人」作品にみるヴィクトリア朝主婦像の変遷—*The Book of Household Management* (1861) の縮刷本に焦点を当てて—
山田千聡（名古屋女子大学助教）

司会 小西章典（大同大学教授）

3. 『バーバラ少佐』とジャーナリズム— ‘I have do it with hydrochloric acid, not with sugar and water’
松本望希（名城大学助教）

第2室（アメリカ文学・イギリス文学）1号館3階13C

司会 柳沢秀郎（名城大学教授）

1. 神域へのためらい：Nathaniel Hawthorne の “The New Adam and Eve” における風の詩学
石川隆士（甲南大学教授）

司会 本田安都子（福井大学准教授）

2. なぜレスタトは蘇ったのか—*Interview with the Vampire* 原作小説と映画アダプテーションの違いにみるポストモダン
山田幸代（愛知淑徳大学非常勤講師）

司会 石川隆士（甲南大学教授）

3. マーク・ハッドンの『夜中に犬に起こった奇妙な事件』における障害と動物
内藤容成（公立諏訪東京理科大学講師）

第3室（英語学）1号館3階13D

司会 内田脩平（愛知淑徳大学講師）

1. 英語の使役動詞における非定形補部節の統語構造と通時的発達について
外翔太（名古屋大学大学院）

司会 玉田貴裕（皇學館大学准教授）

2. Cut in slices と cut into slices の使用頻度に関する一考察—前置詞 in の与格用法と対格用法—
藤原隆史（松本大学准教授）

司会 北尾泰幸（愛知大学教授）

3. 古英語における三人称複数代名詞の形態変化と they の発達過程との関わり—アングロ・サクソン年代記の調査を基に—
小塚良孝（愛知教育大学教授）

特別講演

〈没後 120 年、*KWAIDAN* 出版 120 年〉
ラフカディオ・ハーン、いまを生きる！—文化資源としての作家と文学

司 会 愛知淑徳大学教授 太田直子
講 師 島根県立大学短期大学部名誉教授・小泉八雲記念館館長
小泉 凡

講演内容

『怪談』(1904)の著者として知られるラフカディオ・ハーン(小泉八雲/1850-1904)の社会的意味が変貌を遂げている。作家や作品の鑑賞・研究・顕彰という従来のあり方を超えて、その事績を現代社会に活かそうとする動きが顕著になっている。2009年にギリシャで開催された「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」というタイトルのアート展は、ハーンの開かれた精神を造形芸術で表現するというものだった。分断・対立・戦争とは真逆の方向性をもつ「オープン・マインド」。アート展はアテネ、松江、ニューヨーク、ニューオーリンズへと巡回し、やがてプロジェクトとして大きなうねりとなり、ハーンの生誕地であるギリシャのレフカダやアイルランドのダブリン、アメリカのニューヨーク・シンシナティ・ニューオーリンズでも同じテーマによる展覧会やシンポジウムが開催された。

松江発の新たな試みとしては、「五感力とオープン・マインド」の大切さを子どもたちに継承する「子ども塾—スーパーへるんさん講座」、ハーンの再話怪談をツーリズムとして活かす「松江ゴーストツアー」、ハーンのまなざしとゆかりの地での体験からSDGsを考える講座、松江出身の俳優・佐野史郎、ギタリスト・山本恭司による「小泉八雲朗読のしらべ」などが現在まで展開されている。直近ではイタリア・ミラノでのハーンの怪談アート展(2022-2023)、アイルランド・日本交流美術展「*KWAIDAN*—ラフカディオ・ハーンとの邂逅」(2023~)、ニューオーリンズ・マルディグラ・カーニバルのテーマとしてのハーン(2024)など、世界各地で文化資源的活用がみられる。

現代社会と呼応する新しいハーン文学の世界とその意味を考えてみたい。

講師プロフィール

1961年東京生まれ。成城大学・同大学院で民俗学を専攻後、1987年に松江へ赴任。妖怪、怪談を切り口に、文化資源を発掘し観光・文化創造に生かす実践活動や、小泉八雲の「オープン・マインド」を社会に活かすプロジェクトを世界のゆかりの地で展開する。2022年度全国日本学士会アカデミア賞を受賞。

小泉八雲記念館館長・焼津小泉八雲記念館名誉館長・島根県立大学短期大学部名誉教授。

主著に『民俗学者・小泉八雲』、『怪談四代記—八雲のいたずら』、『小泉八雲と妖怪』ほか。小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)曾孫、日本ペンクラブ会員。

シンポジウム要旨

第1室（アメリカ文学・イギリス文学・日本文学） 1号館3階13B

〈ラフカディオ・ハーン没後120年、*KWAIDAN*出版120年〉—ハーンの「再話」を巡って—

司会	愛知淑徳大学名誉教授	平林美都子
講師	名古屋外国語大学教授	梅垣昌子
講師	愛知淑徳大学名誉教授	小倉 齊 (日本文学)

怪談集 *KWAIDAN* はラフカディオ・ハーンが亡くなる5カ月前に出版された。多くの日本人が「小泉八雲」の筆名で知られる「雪女」や「耳なし芳一」を読んだり聞いたりしているだろう。一方で、来日から亡くなるまでの期間がわずか14年だったと知ると、その短期間で日本の精神を吸収して日本を紹介するエッセイを書き、さらに集大成として *KWAIDAN* を書き上げたというハーンの精力的な仕事ぶりに驚嘆せずにはいられない。

彼の怪談に特異なものがあるとするれば、それは小泉八雲の根幹にハーンという異国人の存在があるため、その二重の文化的背景によって作られたからだろう。しかし、はたして彼が怪談を作ったと言いきってよいのだろうか？ ハーンの怪談は、まず集められ、妻セツの日本語で語り直され、英語に翻訳された。それはまさに「再話」なのである。

本シンポジウムでは、日本文学者小倉齊とアメリカ文学者梅垣昌子がそれぞれの研究の視点から、ハーンの「再話」文学の起源、土地の力ともいべき文化的背景、「再話」文学の身体性など、「再話」を巡るさまざまな問題系を報告する。ハーンの「怪談」の現代的意味を考えるきっかけとしたい。

ラフカディオ・ハーンのニューオーリンズ —〈再・創造〉の起源へ

梅垣昌子

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) は1890年の来日前、アメリカ南部を拠点に文筆活動を行い、膨大かつ多様な文章を新聞等に寄せるとともに、長編小説2編を刊行している。具体的には、1869年に19歳で渡米後、オハイオ州シンシナティで日刊紙に雇われるようになるが、27歳でニューオーリンズに居を移すと、*Item* 紙や *Times-Democrat* 紙に記事を掲載して名を上げた。この間、フランス文学を翻訳し、地元のクレオール民話や伝承の採集に取り組んでいる。ハーンのアメリカ時代について記した Edward Laroque Tinker は、ハーンにとってニューオーリンズの7年間はいわば修業時代であり、ここにおいて彼の文章の技法が完成したという見解を示している。

ニューオーリンズにおいてハーンは、文学史上に名を残した人物たちとも接触している。フランスやスペインによる統治をへてアメリカ合衆国の一部となったニューオーリンズには、カリブ海経由の黒人文化も流入した。多様なエスニシティを包含するこの「異郷の街」に、内外の文人たちが多く引き寄せられたのである。その様子を記した Alan Brown によれば、*The Grandissimes: A Story of Creole Life* の作者である George Washington Cable の住居には、Oscar Wilde や Mark Twain が訪れていたが、ハーンもまたここで、Joel

Chandler Harris に出会ったという。ハリスは黒人の伝承にもとづく再話文学を出版した人物だが、彼はハーンによる Théophile Gautier の翻訳を賞賛したという。

ハーンはまたニューオーリンズ滞在中に、「ヴードゥー・クイーン」として知られる Marie Laveau の元を訪れて話を聞き、その死に際しては *Item* 紙に追悼の記事を書いたが、その中で、彼女が薬草を用いた民間療法により多くの人々を救ったことに触れている。のちに 37 歳のハーンはカリブ海に浮かぶマルティニーク島に渡り、ヴードゥーの物語を採集することになる。本発表では、これら来日前のハーンの足跡を念頭におきつつ、晩年の *KWAIDAN* に結実したハーンの再話文学の起源と手法について、ニューオーリンズ時代の文筆活動を中心に据えて考察する。時間が許せば、19 世紀後半のアメリカにおける人種問題の観点から、ジャーナリストとしてのハーンの現代的な位置付けについても再考を試みたい。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の「物語」―「怪異」と「再話」―

小 倉 齊

ハーンについては、比較文学・比較文化の観点から相当量の研究成果が積み重ねられてきているにもかかわらず、日本近代文学研究の側から見ると、文学者ハーンの評価は根本的なところで、ある種の「落ちつき」の悪さを抱え込んだまま、今日に及んでいる。その「落ちつき」の悪さは、来日後の理解の深化が認められる「怪異」「ghostly なもの（超自然的なもの）」の内実が明らかにされていない点、「再話」という方法がアメリカ時代から日本時代にかけてどう昇華されたかが明らかにされていない点の二つに関わって生じている。この二点を踏まえ、以下のように話を進め、ハーンの文学史的評価を試みたい。

1. ハーン来日時日本の文学状況に焦点を当て、『怪談牡丹燈籠』出版の問題と『小説神髓』で提示・志向された「近代小説」の内実について明らかにする。
2. 『骨董』『怪談』によって、「怪異」「ghostly なもの（超自然的なもの）」への理解の深化を独自の「再話文学」へと昇華させたハーンに H・スペンサーの「進化哲学」と「仏教思想」を結びつけ、「本能」を「組織化された記憶」「生の連鎖における遺伝的記憶」と呼ぶような心理学的認識があることを確認する。
3. 「個人」「オリジナリティ」を前提とする近代にあって、ハーンが進んでいった方向は、日本の仏教思想を媒介とした「個性」の全き否定であった。これをハーンの「物語」に重ねてみる時、「再話」という形式・方法が、いかにハーンにとって相応しいものであり、必然的に選び取られたものだったかが明らかになる。「物語」の語り手は、無名であろうが、名前を与えられていようが、ハーンにとってそれは「個体」ではない。彼らが語る「物語」とは、「幾千万億の死んだ人たち」（「塵」）が発する「真実」の声であり、それらの声は一つ一つでありながら、「死者たちの声」の連鎖のうちに共鳴しあっている「声」でもある。『怪談』巻頭の「耳なし芳一」の語りはその典型である。
4. 時間的余裕があれば、『夜窓鬼談』という書物を介し、「再話」を通して、ハーンと澁澤龍彦の二人の人物が会おうという、やや風変わりな光景について紹介したい。

小・中高・大の英語教育 ～つながりを目指して～

司会	愛知淑徳大学教授	二村 慎一
講師	名古屋市立星ヶ丘小学校教諭	阿部 健太郎
講師	愛知淑徳大学准教授	藤本 恭子
講師	愛知淑徳大学助教	三島 恵理子

学校教育における各教育段階間のつながりが重視されて久しく、英語教育においてもその重要性が高まっている。本シンポジウムでは、3名の講師が小学校、中学校・高等学校、大学における英語教育の現状・実践をそれぞれ報告し、どのように「つなげる」か、またどのように「ひきつぐ」かを考えたい。小学校教諭である阿部講師は英語が教科化された小学校での活動・授業内容を紹介する。藤本講師は中学校・高等学校での指導経験に基づき、特に後者での課題について報告し、コミュニケーション能力の養成について論じる。三島講師は理論的側面から大学における協同教育の必要性を議論し、その実践例を紹介する。英語教育に携わるさまざまな分野の会員のみなさまにご参加いただき、3名の講師の発表およびフロアのみなさまとの意見交換を通して、大学だけでなく、小・中高の教育現場も知り、英語教育を広範に考察する機会になれば幸いである。

互いの気持ちや思いを伝えることのできる児童の育成 ～言語活動を通して～

阿部 健太郎

学習指導要領の改訂により、小学校での外国語教育は大きく変化した。大きな変更点は「小学校3、4年生から外国語活動が開始されたこと」、「小学校5、6年生では外国語活動から外国語科に移行したこと」である。

グローバル化が進む国際社会において、外国語教育はどのように変化し、どのような課題が残っているのだろうか。そこで、大きく変化した外国語教育に対応するため、現在本校ではどのように実践を進めているのか、実践ベースで小学校外国語科について紹介したい。

昨年度担当した、6年生の授業を基に、言語活動を通して、互いの気持ちや思いを伝えることのできる児童の育成に向けて行った実践の紹介である。

中・高英語教育の現場から ～大学へとつなげる「コミュニケーション能力」～

藤本 恭子

2022年度まで英語教員として中学・高校の学校現場で勤めた経験から、生徒及び英語教師たちがどのような課題と直面してきたのか・しているのか、実態報告を行う。「英語の授業は英語で」、「入試に外部試験導入(?)」、「小学校英語教科化」など、文科省が新しい指針、改善策、新学習指導要領を発表する度、学習者・保護者・教師がどのように対処してきたかの現状報告の後、今後の課題について検証する。また、世間の「コミュニケーション能力」そのものへの誤解について指摘し、小・中高・大が連携して、本物の「コミュニケーション能力」をもつ「国際人」育成をどのように図れるかについて、模索する。

大学英語教育に求められるもの ～協同教育、グループ間結束の必要性～

三島恵理子

自立を求められる大学生活では、コミュニティの発掘・形成が非常に大きく学びを左右する。特に英語が指導言語とされている授業、またディスカッションなどが頻繁に行われる語学教育では、情報を共有し、不安や喜びを分かち合える友人の存在が授業参加への意欲、学びへの動機づけにも影響を与えていると考えられる。大学の英語教育においてはグループ形成、関係性の構築にはあまり注目されていないが、コロナ以降発展してきた大学のオンライン授業、オンデマンド課題の充実により、対面を必要としない学習環境も増える中、学生の Well-being の促進に必要なコミュニティ形成をサポートすることも、大学語学教員が担う役割の一つではないだろうか。高校までにあった安心できる空間・仲間 (Group cohesion) を大学の教室内にも形成できれば、より快適で効果的な英語交流に挑戦することが可能になる。そのための協同教育、グループ結束についての考え方を、活動例などもあげて紹介したい。

研究発表要旨

第1室 (イギリス文学) 1号館3階13B

司 会 静岡大学教授 鈴木実佳

第1発表

『ジェイン・エア』におけるエドワード・ロチェスターの「身体障害」

フェリス女学院大学大学院 橋本千春

本研究発表では、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) の『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) において、身体障害者になった男性主人公エドワード・ロチェスター (Edward Rochester) の「男性性」に着目する。その際、彼のロマンティック・パートナーである女性主人公ジェイン・エア (Jane Eyre) との関係に目を向ける。そして、たびたび“reader”と呼びかけながら物語を展開する作者シャーロットが、ロチェスターをどのような男性として読者に提示していたのかについて考察する。考察方法は、19世紀の中産階級における「主流」のジェンダー・イデオロギーを用い、ロチェスターの言動を19世紀の中産階級における「主流」のジェンダー・イデオロギーと比較する。そうすることで、先行研究では、バイロニック・ヒーローや青髭のような男性として捉えられてきたロチェスターを、ここでは、それらとは異なる見解を提示する。

第2発表

「ビートン夫人」作品にみるヴィクトリア朝主婦像の変遷—*The Book of Household Management* (1861) の縮刷本に焦点を当てて—

名古屋女子大学助教 山田千聡

イザベラ・メアリー・ビートン (1836-65) は、ミドルクラスの女性向け家政書である *The Book of Household Management* (1861) の編著者として名高い。しかし、*The Book of Household Management* 以外にイザベラが携わった作品の内容や出版背景、普及状況には、ほとんど光が当てられてこなかった。

そこで本発表では、ビートン夫人が編集に関わったと考えられる *The Book of Household Management* の縮刷本を取り上げる。具体的には、*The Englishwoman's Cookery Book* (1863)、*Mrs. Beeton's Dictionary of Every-Day Cookery* (1865)、*Beeton's Every-Day Cookery and Housekeeping Book* (1872) の三冊である。各作品からは、時代風潮や読者の要望をくみ取り、本文の内容・構成や価格を変更し、読者層を拡大しようとする戦略がうかがえる。よって本発表では、各作品の出版状況を追いながら、作品間の相違点を考察することで、ヴィクトリア朝中期の主婦に求められた家庭経営術とジェンダー規範の変化の様相を明らかにする。イザベラと夫のサミュエルが意識した読者像を浮き彫りにし、彼らの編著者としての先見性と洞察力を再評価したい。

第 3 発表

『バーバラ少佐』とジャーナリズム—— ‘I have do it with hydrochloric acid, not with sugar and water’

名城大学助教 松 本 望 希

本発表では、ジョージ・バーナード・ショー『バーバラ少佐』(*Major Barbara*, 1905) と、20 世紀初頭のイギリスにおけるジャーナリズムの様相の関係について考察を行う。作中、武器商人アンダーシャフトは息子スティーブンを、自らが営むアンダーシャフト商会の後継者にはふさわしくない、「生まれながらのジャーナリスト」だと蔑む。アンダーシャフトのこの発言の背景に存在するのは、善悪を二項対立的に捉えることしかできないスティーブンへの皮肉だけではない。戯曲家として成功する以前より音楽評論家として活動していたショーは、いわばジャーナリストでもあり、作中にはメディアに流される大衆への批判までも見出すことができるのである。さらに、19 世紀後半に登場した、報道の正確性や客観性を重んじるニュー・ジャーナリズムとの関連からショー作品を考察し、ショーの織り成すリアルスティックな舞台空間について明らかにしたい。

第 2 室 (アメリカ文学・イギリス文学) 1 号館 3 階 13C

司 会 名城大学教授 柳 沢 秀 郎

第 1 発表

神域へのためらい : Nathaniel Hawthorne の “The New Adam and Eve” における風の詩学

甲南大学教授 石 川 隆 士

本発表は Nathaniel Hawthorne の小品、“The New Adam and Eve” を、「風の詩学：豎琴と螺旋」という研究テーマの文脈において分析するものである。

「風の詩学」とは、自らを取り囲む空間に対する人間の意識の変遷を、風の表象という側面から明らかにするものであり、「豎琴」と「螺旋」という二つの修辞をその機軸とする。「豎琴」はギリシャ神話の昔から世界の「照応的調和」の象徴であったが、ロマン主義以降、自然が弾き手となる「イオリアの豎琴」がその代表となっていった。一方「螺旋」は混在する多様な存在が互いの関係を見出しながら実現されていく「生成的調和」を表象している。18 世紀のイギリスに始まり、ヨーロッパを席卷し、19 世紀のアメリカロマン派に熱狂的に迎え入れられた「イオリアの豎琴」は、しかし、この熱狂のさなかにあって、世界の照応的調和に対する戸惑いを生じ、それが生成的調和への移行の「問い」を誘う。そのささやかな道しるべとして Hawthorne の “The New Adam and Eve” を考察する。

第 2 発表

なぜレストは蘇ったのか——*Interview with the Vampire* 原作小説と映画アダプテーションの違いにみるポストモダン

愛知淑徳大学非常勤講師 山田幸代

Anne Rice による小説 *Interview with the Vampire* (1976) は、もとはヨーロッパの民間伝承に端を発し、イギリス文学においても一つの系譜が築かれてきた吸血鬼伝説を、アメリカに舞台を移して発展させた物語である。この小説は 1994 年に同名タイトルのもと、ハリウッドで映画化されている。映画の脚本はライス自身によるもので、一見すると原作に忠実であるように見えるが、いくつかの点で大きく異なっている。なかでも顕著な違いがラストシーン、言い換えればヴァンパイアとのインタビューが終わった後、主人公ルイを吸血鬼にしたレストが、小説の最後では意気消沈したまま舞台から姿を消すのに対し、映画では復活を遂げ観客に強烈な印象を残す場面である。本発表ではこれまでほとんど論じられることのなかった、こうしたアダプテーションにおける改変を、小説から映画化に至るまでの 1970 年代から 90 年代における社会的傾向と、読者および観客の受容方法の変化に着目して分析する。

司 会 甲南大学教授 石川隆士

第 3 発表

マーク・ハッドンの『夜中に犬に起こった奇妙な事件』における障害と動物

公立諏訪東京理科大学講師 内藤容成

マーク・ハッドンの『夜中に犬に起こった奇妙な事件』(2003)では、15歳の少年クリストファーが隣人の犬の不可解な死の真相を探る過程が語られる。数学と物理に類稀な才能を示すが対人障害を抱える主人公は自閉スペクトラム症患者であるらしい。認知的個性を持つ彼の視点から障害を周縁化する現代の英国社会が描かれるこの小説は、これまで主に障害学の理論的枠組みの中で論じられてきた。主人公の発達障害については多くの先行研究が言及する一方で、小説内に現れる動物の表象については十分な注意が払われていない。しかしながら、表題の犬をはじめこの物語は多様な動物たちの存在で満ちている。本発表ではフェミニズムとケアの倫理の観点から障害学と動物の権利運動を架橋するスノウラ・テイラーらの議論を参照しながら、この小説が健常者中心主義の世界における障害と動物の交差性を描き、両者の抵抗と解放の手がかりを示唆する物語であることを明らかにする。

第1発表

英語の使役動詞における非定形補部節の統語構造と通時的発達について

名古屋大学大学院 外 翔 太

本発表では、使役動詞 **make** と **let** の非定形補部節の歴史的発達に関して統語的説明を与えるを試みる。先行研究である山村(2015)は、古英語から近代英語までの調査を行い、**make** の非定形補部節には **to** 不定詞と原形不定詞の両方が出現していたことを明らかにしている。本発表では、山村が言及していないそれらの内部構造に関して Tanaka (2007, 2010)などに基づいて説明を与え、現代英語とは内部構造が異なる ECM 節及び原形不定詞が存在していたことを提案する。また山村では扱われなかった **let** についても歴史コーパスを用いて調査を行い、中英語から近代英語にかけての非定形補部節の用例数を明らかにし、**make** とは異なる歴史的変遷を辿ってきたことを示す。現代英語において統一的に分析される使役動詞の補部構造であるが、**to** の再分析により出現した TP を多く取っていた時期が存在する **make** と、叙述認可の目的で出現した TP 構造のみを取っていた **let** では、その発達過程が異なると分析する。

司 会 皇學館大学准教授 玉 田 貴 裕

第2発表

Cut in slices と cut into slices の使用頻度に関する一考察—前置詞 **in** の与格用法と対格用法—

松本大学准教授 藤 原 隆 史

前置詞 **in** の意味論研究においては、**in** の中心義とされる「容器」の意味からのメタファー的意味拡張で各意味用法が説明されることが多い。しかしながら、一部の意味用法では「容器」のイメージスキーマによる説明が破綻してしまう場合がある。例えば、**John broke the stick {in/into} pieces.**においては、**into** だけでなく **in** の使用が容認されるが、この場合の **in** を「容器」の意味から説明することは困難であると言わざるを得ない。Oxford English Dictionary の記述によれば、このような場合の **in** は古英語期に用いられた対格用法の名残りであり、**in** 句は動詞が表す動作による変化結果を表すことができたことが分かる。本研究では、変化結果としての **in** 句が実際にどの程度の頻度で用いられていたかを検証する。具体的には、変化結果として **in/into slices** という句を対象として、Corpus of Historical American English を用いたコーパス分析について述べる。結果として、近代英語期には **into** よりも **in** の方が変化結果を表す文脈で多く用いられていたことを示す。

第 3 発表

古英語における三人称複数代名詞の形態変化と they の発達過程との関わり—アングロ・サクソン年代記の調査を基に—

愛知教育大学教授 小塚 良 孝

三人称複数代名詞 they は、古英語の人称代名詞の形態の曖昧化により生じた同音異義衝突の解消のため、古ノルド語から借入されたか、古英語の指示代名詞から発達したものだと考えられている。また they 型の普及・定着については、(1) 主格→属格→目的格という順で定着したこと、(2) 定着が主格から進んだ要因として、主格の語形とそれを受ける動詞の語形の単純化が進んだことにより新たな語形の必要性が特に高かったということが言われている。しかし、以上のような様々な見方に関して検証は十分なされていない。そこで、本発表では、「アングロ・サクソン年代記」の人称代名詞の調査を基に以下の可能性を議論する。(I) 北部方言以外では、三人称代名詞の同音異義衝突の回避のため、新たな複数形態素として-eo-を発達させた。

(II) 北部方言発祥と考えられる they 型は他の方言では-eo-の定着度が高い格ほど浸透に時間がかかり、格形による定着時期の差につながった。

大会関係役員一覧

支部長	太田直子	(愛知淑徳大学)
副支部長	中郷慶	(愛知淑徳大学)
支部選出評議員	山本卓	(金沢大学)
支部代表理事	杉野健太郎	(信州大学)
事務局長	二村慎一	(愛知淑徳大学)
事務局長補佐	樗木勇作	(愛知淑徳大学)
事務局長補佐	若山真幸	(愛知淑徳大学)
書記	小沢茂	(愛知淑徳大学)
監事	小池晃次	(富山大学)

大会準備委員 (◎委員長 ○副委員長)

英文学	小西章典	(大同大学)
	石川隆士	(甲南大学)
	○鈴木実佳	(静岡大学)
米文学	柳沢秀郎	(名城大学)
	本田安都子	(福井大学)
英語学	玉田貴裕	(皇學館大学)
	内田脩平	(愛知淑徳大学)
	北尾泰幸	(愛知大学)
	◎大澤聡子	(岐阜市立女子短期大学)

開催校大会準備委員

内田脩平
笠井俊宏
藤本恭子
三島恵理子